名古屋経営短期大学紀要　第 63 号　109～112 頁

［書 評］　小泉和子著『昭和なくらし方 ― 電気に頼らない、買わない・捨てない、始末のよいくらし ―』

The living one that is Showa ― Good living of the disposal not to buy it, and not to abandon not to depend on electricity for ―

岩本 義浩
Yoshihiro Iwamoto

〈摘　要〉

本書は、日本古来より受け継がれてきた文化を礎にした人の生き方について、昭和 20 年代後半から昭和 40 年代前半に焦点を当てた日本人の生活文化を家庭目線といった内容で描かれている。

その内容は、第二次世界大戦で多くの国民が物資のない時代に日本人ならではの生活への工夫がこの本に紹介されている。それは、2015 年 9 月の国連サミットで採択持続可能な開発目標（SDGs: Sustainable Development Goals）の項目に既に該当した生活を展開していた様に感じる。物を大切にする気持ちと感謝の心を持つ姿勢は、国連サミット以前に日本人のスタイルであったと感じる。

しかし、高度経済成長と共に、人の役割の細分化が進み浅く広く行える概念が深く狭く理解する概念へと移行したことにより役割の範囲を超える行為は他者任せになってしまった様に感じている。

本書のテーマ、頼らない、買わない・捨てない、始末のよいくらしを「社会に求められる暮らし」として、4 部で構成された内容に本来のあるべき日本人の姿があった様に感じられ現在社会の求められる姿を本書で紹介されている様に思われる。是非 SDGs を紹介する書籍として紹介する。

〈キーワード〉伝統的価値観　生きるための創意工夫　生活支援技術

Ⅰ．はじめに

本書のはじめに「紐が結べない子供がいるといわれたのは大分前のことですが、最近は

子供だけでなく、大人でも結べない人が大勢います。紐だけではありません。マッチを擦ったことがない、火を燃やしたことがない、箒でどう掃くのかわからない、縫いものをしても玉留めを知らないため、糸が抜けてしまうなんて人が、50代、60代の人にも大勢います」と紹介している。

火を燃やす行為は、最近は家族でキャンプを行ったりしてマッチでなくともライターを持参することで理解する子供たちその両親もいることと思う。しかし、紐を結べない、箒を使わない人々については同感する。

介護教員となり約20年が経とうとしている中で、後ろ手でエプロンの紐留められない学生はかなりの数見てきた。できたという学生の3割以上は縦結びとなってしまい、紐を留めた風に何となく紐と紐を絡めているだけで結んでいない学生もいた。

筆者がある学校に赴任した際、実習・演習用エプロンの背がボタン留めになっていた。経緯を聞くと以前は紐だったが学生が授業前準備に時間がかかるため、紐からボタン対応のエプロンに変えたとの事であった。こんな問題がある中この書籍と出会い、日々の生活の基本となる事を紹介することで、社会的課題の本質を考えるきっかけとなると思い本書を紹介する。

Ⅱ．本書の概要

摘要にも書いたが、本書は4章立てされており東京の下町での生活様式、工夫を紹介しされている。

1章は、電気に頼らずに生活をしていた時代の紹介となっている。

エアコンのない時代の工夫された生活や「しつらい」する日本住宅の文化伝統の中に灰汁などを洗剤として使う洗濯板での洗い物や冷蔵冷凍庫のない時代の野菜類の保存方法、さらに野菜を腐らせないための漬物などの保存方法について紹介している。他にも掃除機を使わずに箒・はたきを使って室内外をきれいにできることや炊飯器の代わりに竈を使ってお米を炊く工夫についてまでを紹介している。

これら電気を使わないことで、家事を行うことができる。さらに電気がない時、昔の生活の知恵によって洗濯や掃除では汚れがピンポイントで綺麗にでき、食事においては美味しいものが食べられ、漬物などの保存方法で廃棄するものを減らせることを紹介している。さらには、災害時の工夫にも繋がることがあると感じられた。

2章は、捨てない・買わないくらし方について述べている。

食材購入への知識・購入⇒購入後の知識・情報⇒技術・創意工夫が食材を購入するまでに連動している。食材一つを購入するにもその食材を選ぶための選択眼も現場では必要と

なると説いている。

さらに、廃物利用や年月が過ぎ去る中で必要とされたものがやがて不要になりお蔵入りするものを再度見直していくことで新たに購入しなくても既にある物で使用可能であることを紹介している。

3章では、始末の良いくらし方について、リサイクル物に服を繕うことで生地の再生が生まれることを紹介している。来ていた服を服としてではなく、服を解くことでパッチワークや別の服に生まれ変わることが出来ることを紹介している。

この章では「時間を始末」についても紹介している。「時間は『伸び縮みするゴムの袋のようなもの』」に「現代人の生活は全体的に夜型になってきていますが、にほんには『朝飯前」』や『早起きは三文の徳』といった言葉やことわざがあるように、昔の人は朝食前の時間を有効に使っていました。とくに農家などは、暑い時期は早朝にひと仕事して、昼寝を少しした方がよほど作業の能率が上がるからです」と述べている。夜型であった学生時代の私は、夜でなければできない生活があった。深夜の心のざわつく心を助長するかのようなテレビ番組、ラジオの視聴やバイト後の友達と集まれる時間になっていた。時代時代、世代によって一日の時間の使い方や過ごし方はあるのではないかと思う。現在社会人となり60年近い人生を送る中で午前5時過ぎに目が覚め、朝昼食を作りお茶を啜りながら、新聞や朝のニュースを見ることが日課となっている。

4章では、人を育てるくらし方について書かれている「コミュニケーション能力、生活力を地域で育てていた」と紹介され大家族であった時代にコミュニケーションは必然であり兄弟姉妹喧嘩、親から叱られる、仲良くなり可愛がられることもある。人間関係を地域住民と幼い頃から接触し話をすることで目的をもって一体感や成し遂げることが出来ると述べている。

以上の内容から現代の課題は、物質に恵まれ人と接しなくても日々の生活は完結できる。それがさらに一人だけの時間が持ちやすくなることで他者との接点を持たずして生活できることが現実化し、知らぬ間に便利がものを考えない生活に繋がっていることを警鐘しているように感じた。

Ⅲ．本書の意義

今は、新型コロナにより生活が一変している人が増えていると言われている。自宅で仕事を行い自宅にてインターネットでの食材購入により、温かく美味しく作られた外食を配達してもらう出前システムや、配達専門業者が代行しユーザーとお店を結ぶことで好きな

お店の料理をドアツードアで受け取ることになってきている。或いは、玄関先のボックスに入れて置いてもらえば、配達人の顔を見ずに商品を取ることが出来る生活空間が成立してきている。

2章で紹介されている購入から料理までの展開はそっくり抜け落ちてしまう現象が今まさに行われており、人と一日接しない状態で過ごせる状況に居心地のよさを感じているような社会が出来上がろうとしているのではないかと思う。

しかし一方で、災害の多い我が国日本は、毎年全国の何処かで水害、震災など天変地異に見舞われる大地の上で生活していることを理解することが必要であろう。

本書では、今ある生活に古き時代の生活様式として世に流すのではなく、今の生活に取り入れ或いは不自由な生活を体験する。体験により困ったことが派生し他人に頼らざるを得ない生活でコミュニケーションする大切さを理解することができ相手の喜怒哀楽を知ることで他人との関係性が深められる。

Ⅳ．おわりに

現在社会において、本書で紹介する時代よりはるかに物質が増え工夫を考えなくても必要なものは一人称として購入することが成立してしまうことに課題があるのではないだろうか。何も悩まず携帯で必要な物は全て購入できてしまう。

最近、エッセンシャルワーカーと呼ばれる業種の中に「医療・福祉に関わる全て、高齢者、障がい者の支援に関する全て」がある。

正しく本学科である健康福祉学科の学生は、卒業し就職していく先の多くがこのエッセンシャルワーカーとして第一線で働いていくこととなる。つまりは、人と関わり、生活に工夫を求められる職業である。災害にもし見舞われることがあれば、いち早く介護対象者も身を守り安全な生活を送れるように支援していくことが求められる。

この支援が今後展開していくためにもなくてはならない授業科目であろうことを改めて理解できる書籍である。

〈書籍情報：「昭和なくらし方 ― 電気に頼らない、買わない・捨てない、始末のよいくらし ―」小泉和子著　河出書房　版型 B5〉